


獨協大学長殿

学外研修報告書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報告日	2023年 4月 21日	所属	外国語学部ドイツ語学科
職名	准教授	氏名	伊豆田俊輔 
研修種別	①. 海外 2. 国内	研修種類	①. 長期 2. 短期
研修期間	2022年 4月 1日 ~ 2023年 4月 1日		
学外における主な研修機関および訪問先 マルティン＝ルター＝ハレ＝ヴィッテンベルク大学			
出張目的または研究題目 研究題目：東ドイツにおけるナチズムの経験史 —知識人のエゴ・ドキュメントを中心に—			
資格 ①. 2022年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（)			
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額		300 万円	
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入）			
・研究と研修内容の概要 報告者は、2022年度に獨協大学の長期学外研修（海外）を利用し、ドイツのザクセン＝アンハルト州のハレ市にあるマルティン＝ルター＝ハレ＝ヴィッテンベルク大学第一哲学部付属の歴史学研究所の客員研究員として研究を行った。本研究「東ドイツにおけるナチズムの経験史」は、旧東ドイツにおいてナチズムの体験がどのように記憶され、解釈され、社会的・政治的行動に結びついたのか、またナチ時代・占領期・東ドイツ時代の間には、どのような連続性が存在するのかを問うものである。			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

報告者はこの問いに答えるため、2020年度から「ポスト・ナチ」という視角を援用し、旧東ドイツにおける知識人のライフ・ヒストリーを研究してきた。東ドイツ国家は「反ファシスト」国家であると自認していたが、特に1950年代までは、ほぼすべての住民がかつてのナチ時代と戦争を経験していた社会＝「ポスト・ナチ社会」でもあった。個人の経験の歴史に着目すると、ナチ時代の終わりから東ドイツの成立期までは、一つの連続した時代として捉えられる。

こうした背景を踏まえ、報告者はナチ時代から戦争と占領を経て東ドイツに至るまでの時代を、知識人たちの人生行路に沿いながら検討してきた。研修期間中はハレ大学に生活と研究の拠点を置き、戦後東ドイツにおける教養市民層（芸術家や学者、教員や医師、事務職員などを含む）にとって、ナチ時代の経験は戦後の政治参加に、どのような影響を与えたのかを調査を進めた。以下、研究の遂行過程とその成果（公表予定を含め）の概略を示す。

1. ヴォルフガング・ハーリヒのライフ・ヒストリーの調査

1.1. 研修経過の詳細

ヴォルフガング・ハーリヒは1923年にケーニヒスベルクで生まれ、戦後は東ドイツを拠点に活動した哲学者であり、1970年代以降は環境保護思想家としても活動した。報告者は、2010年代後半から刊行されている著作中を系統的に読み進め、複数の自伝・伝記・回想を組み合わせることで、ハーリヒの思想の発展のプロセスを跡付けてきた。2022年度は、これまで重視されてこなかったナショナリストとしてのハーリヒの思想に光を当て、さらにナチ支配下の青少年時代の経験と東ドイツ時代の経験の連続性にも関心を払い、1950年代のハーリヒの東ドイツ改革構想が、第二次世界大戦前の国境線を有するドイツ・ライヒ（帝国）の再生を企図したものであることを明らかにした。ハーリヒにとってナチズムは克服すべき過去であった。しかし、青少年期のナチズムの経験は、ネイションとライヒ（帝国）の一体性の重視という形で、後年の彼の政治活動に影響を及ぼしたと言える。

1.2. 研究成果発表の予定

この研究の成果は、論文「東ドイツという境界—『ナショナル・コミュニスト』としてのヴォルフガング・ハーリヒ（仮）」としてまとめた。本論は論文集『ドイツ国民の境界』（勉誠出版）として2023年の秋に公表される予定である。

2. 教養市民たちの社交の場としての「文化同盟」の研究

2.1. 研修経過の詳細

報告者はこれまで博士論文のなかで、東ドイツにおける知識人たちのネットワークの場として「ドイツの民主的再生のための文化同盟」（以下、文化同盟）という結社の歴史を研究してきた。今回の研究においては、研究の対象を一部の知識人に限らず、会員の多数を占めた旧教養市民たちの文化同盟内の活動を調査した。

そのため、①ベルリン連邦文書館、②ザクセン＝アンハルト州立文書館メルゼブルク分館、③ザクセン＝アンハルト州立文書館マクデブルク本館、④メクレンブルク＝フォアポンメルン州立文書館（シュヴェリーン）で一次史料を収集した。特に①では文化同盟の中央レベル、ベルリン市での活動を調査し、中・下級の幹部の集団的回想録を渉猟した。ここでは1945年を起点にするのではなく、ナチ時代・第二次世界大戦の時期にいかなる体験をしたのかを含めて調査を行った。文化同盟は1985年に『einer neuen Zeit Beginn（新しい時代の始まり）』という回想録を刊行している。報告者は、本書の企画・草稿を①で閲覧し、決定稿と草稿に大きな相違があることを発見した。本書は1945年を「新しい始まり」として設定し、草稿に存在したそれ以前（＝ヴァイマル・ナチの体験）の記述を削除していた。報告者は今後、決定稿と草稿の違いを合わせて検証することで、ナチ時代からの東ドイツまでの経験の連続性を明らかにする計画である。②③④では、戦後間もないメクレンブルクやザクセン＝アンハルトの諸支部において教養市民たちがどのように社交の場を形成していたのかを調べている。加えて、文化同盟シュトラールズント市支部で80年代に働いていた旧職員と計4回のインタビューを行った。

以上の過程で収集した史料に基づき、戦後間もない時期から50年代までの後半の文化同盟の4つの特徴が明らかになった。

第一点は、社会層の部分的な変化と継続性である。設立当初、もっぱら都市の教養市民から構成されていた文化同盟は、50年代後半になると、労働者や農民を文化の担い手にするべく、改革を始めていた。この変化は少数の労働者・農民の理事の参加として確認することができる。ただし、その変化は限定的であり、少なくとも50年代後半までは、同組織は都市のホワイトカラーを中心とした組織であり続けた。このことは、東ドイツにおける社会階層や階層ごとの文化的な行動規範が、ナチ時代やヴァイマル時代からある程度受け継がれ、社会主義社会でも人々の行動に影響を及ぼしたことを示すものである。

第二は、旧ナチ党員の扱いの変化である。敗戦直後のドイツにおいて、ナチ党員が文化同盟会員になることは明示的に禁止されていた。1950年代後半になると、（その規定は変わらないまま）ナチ党員や突撃隊であった会員や理事が増えていることが確認できた。ただし、これは中央のレベルの変化であり、ローカル（地元のコミュニティ）においては、戦後間もない時期から旧ナチ党員が会員になっていた事例が排除できない。しかしながら、大まかに見てみると、「反ファシズム国家」たる東ドイツでも、旧ナチ党関係者の社会的な統合は、時代の経過とともに進められたと推定することができる。この点については集めた史料を読み進める中でさらに明らかにしていきたい。

第三の特徴は、女性会員の社会的な地位上昇である。設立時から文化同盟の会員は、男女が同数近い数であった。ただし初期の文化同盟は、女性幹部が極めて少なかった。その後、50年代後半には女性幹部の登用が進んだ。現在、報告者はこうした1950年代に新しく幹部に登用された女性として、ゲルトルート・ザッセという人物の経歴を調査している。ザッセはナチ時代までザクセン＝アンハルトで教員としてギムナジウムに勤務していたが、ナチ時代にナチ党婦人関係団体への協力を拒んだことで職を失っていた。第二次世界大戦後は、ソ連軍の文化将校との出会いを通じて、ドイツ文化の再興と女性の社会的な保護・進出を訴えるため、文化同盟に参加することになった。文化同盟は、かつての都市有産階級あるいは教養市民の女性にとって、新たな社会進出の場としても機能したのである。

第四の特徴は、戦争捕虜の社会への再統合としての側面である。前述の文書館の調査を通じて、文化同盟には多数の（ソ連軍に捕らえられていた）戦争捕虜が参加していることが明らかになった。彼らは元々都市部で暮らしていたホワイトカラーが中心である。東ドイツ当局やソ連軍軍政部にとっては、彼ら元捕虜は、教養市民たちの支持を取り付けるための先兵となっていたことが考えられる。文化同盟は、戦時の捕虜に対する文化活動の延長としての側面を有していたのである。

2.2. 研究成果発表の予定

上述の第一から第三の特徴は、文化同盟に参加の機会の拡大と位置付けることができるが、この暫定的な成果は研究ノート「東ドイツにおける『公共性』と『超党派性』—文化同盟の議論を中心に—」（元になったものは2021年のシンポジウム報告）の加筆修正に活かしている。この研究ノートは雑誌『ゲシヒテ』で公表される予定である（査読審査は終了しているが、編集部の都合により掲載号は未定）。

加えて、1945年から1950年代までの文化同盟の変化については、2022年度冬学期のハレ大学第一哲学部・近現代史コロキウムで研究報告を口頭で行っている。（報告タイトル：Der Kulturbund in der SBZ/DDR — Eine Nische oder bürgerliche Öffentlichkeit im Sozialismus?（東ドイツの文化同盟—社会主義における「ニッチ」／公共圏？。報告日2022年11月3日）。

またベルリンの連邦文書館で閲覧した文化同盟幹部たちのナチ時代の経歴（戦争捕虜や国内での戦争動員の体験）は、1年以内に『獨協大学ドイツ学研究』で論文あるいは史料紹介という形で公表する予定である。くわえて、本研究の成果に基づき、2014年に提出した博士論文を改稿し、3年以内の単行本としての刊行を目指している。